

夏目漱石とクラシック音楽

(第7回)

美禰子の教会

音楽学者・元東京藝術大学特任教授
瀧井 敬子

前回は、ドイツ留学前の無名の山田耕筰と夏目漱石に思いがけない接点があったことについて触れた。今回は、『三四郎』のヒロイン美禰子の教会と山田耕筰との接点について語ってみたい。

小説のクライマックス近く、三四郎は美禰子が「チャーチル会堂」から出て来るのを待っている。

やがて唱歌の声が聞えた。讚美歌というものだろうと考えた。締切った高い窓のうちの出来事である。音量から察するとよほどの人数らしい。美禰子の声もそのうちにある。

美禰子が礼拝に通っていた「チャーチル会堂」は、本郷の「中央会堂」だと考えられている。カナダのメソジスト会から派遣された伝道師イーによって創立された。会堂は1890年（明治23）12月末に完成、翌年1月3日に献堂式が行われた。資料によると、尖塔が薄いオレンジ色、大屋根には洒落た軒じゃばらが付き、正面にはステンドグラスが嵌められていたという。その美しさは、東京名所絵図の一つになったほどであった。

日本で最初にパイプオルガンが響いた教会でもあった。ウェールズから来日したエドワード・ガントレットが、ヴォカリオンというペダル鍵盤つき的大型オルガンをパイプオルガンに改造したのである。ガントレットはオルガンの構造に詳しく、このウェールズ人が一目惚れして、結婚し

たのが山田恒。その女性こそ、山田耕筰の実姉であった。耕筰は義兄ガントレットから音楽の基礎を学び、東京音楽学校に合格したのであった。

「中央会堂」では、慈善演奏会がよく開かれた。寺田寅彦も何度が行っている。夏目漱石は『琴の空音』のなかに、「ゆうべ昨夕中央会堂の慈善音楽会とかに行つて遅く帰つたものですから、つい寝坊をしましてね」というセリフも入れている。

1923年（大正12）9月、関東大震災が起こった。木造建築であった会堂は、完全に焼失。しかし礼拝はバラック建ての仮会堂で続けられ、6年後の1929年（昭和4）に鉄筋コンクリートで新築された。アメリカ人ヴォーゲルの原案、川崎忍による設計であった。1941年（昭和16）、プロテスタント各派が合同した日本基督教団の設立に伴って「中央会堂」という名称は変更され、「日本基督教団 本郷中央教会」となった。1945年（昭和20）の東京大空襲で罹災。修復されて現在に至っている。1998年、登録有形文化財に指定された。

パイプオルガンに関しては、ガントレットの故郷ウェールズの教会で使われていた1890年代製のものが幸運にも見つかって、関東大震災による焼失後87年を経た2016年、再び設置された。今年は2月17日に、パイプオルガン維持のための献金コンサート（入場無料）が行われた。